

■アングレーム国際漫画祭 アートディレクターからのメッセージ■

アングレーム国際漫画祭は、世界で最も歴史のあるマンガ・フェスティバルです。45回目を迎えた2018年は、来場者数20万人、作家1500名、ジャーナリスト800名を迎え、約10種の展覧会を行いました。世界にはバンド・デシネ、アメコミ、漫画の三大マンガ文化圏がありますが、その中でも今回は特に日本の漫画にオマージュを捧げるため、『マンガの神様・手塚治虫展』を開催しました。全時代を網羅する200点の原画を展示し、マンガ・アニメ産業における手塚治虫の唯一無二の重要性を紹介しました。個性的で創意に富んだアーティストとしての側面や、独特の比喻やこだわり続けたテーマが散りばめられた世界観、また各時代との関係性をより深く知ることが出来る原画を選びました。西洋の人々にとって手塚治虫は、漫画文化、日本のグラフィックの伝統、日本の文化・歴史を知るための開かれた窓なのです。

フランスでは1980年代より手塚治虫の名が広く知られるようになりました。この頃、『鉄腕アトム(二作目)』のテレビアニメがフランスの最大手テレビチャンネルで放送され、私の世代は今でもその時の衝撃を鮮明に覚えています。1990年代半ばに日本の漫画が本格的に輸出され始め、手塚漫画のフランス語版が出版されると、想像をはるかに超える豊かな多面性にフランスの読者達は驚かされました。そして、これまでの漫画ファンとは違う新しい読者層を獲得し、心を掴まれた批評家達は「近代漫画の生みの親である最も重要なアーティスト」と紹介しました。こうして日本の漫画、中でも手塚治虫の作品は、西洋のクリエイターたちに影響を与えました。

フランスで大きな反響を呼んだ本企画の日本での実現を可能にして下さった手塚治虫記念館および手塚プロダクションに、アングレーム国際漫画祭を代表して心より感謝申し上げます。世界のあらゆる芸術分野の領域を越え、20世紀最も偉大なクリエイターの1人である手塚治虫。その偉業を間近で見ることが出来る貴重な機会です。自らの芸術を常に変化させ、日本社会に影響を与え、ヒューマニズムに満ちた作品で全世界に語りかけた手塚治虫の世界をぜひお楽しみ下さい。

アングレーム国際漫画祭
アート・ディレクター
ステファン・ボージャン